



# 針葉樹會報

復刊43号 1975年6月

## 会津朝日岳（一六二四m）

残雪期の南会津の山々は、標高が低いにかかわらず、立派な山容を示しているものが多い。堅雪の上をどこでも歩けることも、その季節の山登りを、こよなく楽しいものにしてくれる。山麓にはブナの芽ぶきが美しく、ニオイコブシの花も真白だ。空はあくまで青い。南会津の山々は紅葉期もいいが、私は残雪期がいちばん好きである。

一九七一年五月三日撮影。

望月達夫

## 目 次

山菜について

丸 山

三峰から雲取へ

蕗のとうに当つた話

聖岳・赤石岳

僧ヶ岳から剣岳へ

中川・孫さん追悼山行

一九七四年山行表(続)

村尾 金二 1

望月 達夫 2

宮城 恭一 3

久保孝一郎 4

山本健一郎 9

藤本 敏行 12

19 14 12

## 山菜について

村尾 金二

私は余り食事の量が多くない（若い頃は別だつたかもしぬが）そして食物の好みも大してない。嫌でどうしてもたべられないものもなければ、好きで夫がなけば困ると言つたものもない。あるものなら何でもたべる。いわゆる貧乏性と言うものだろう。こんな味覚の持主が山菜を語るものおかしな話である。

近頃山菜が珍重されてきた。私も前からたべる機会があつたからよく食べた事はあるが一口、二口は美味しいが珍重する迄には至らない。元来山菜は飢饉の時食物を求めて段々山奥に入つて得た救荒食物であつて止むを得ずたべるものらしい。それが美味しいのが残つて今の山菜になつたのだろう。山菜にはタラ、コゴミ、イタドリの様に若芽や若葉をすぐた

べるものと、ワラビ、ゼンマイの様に或程度加工して保存食に近いものとある。いわゆることの方は香りが高くて美味しいものだが、味自体は余りない。それで、クルミ和えとか、ゴマあえのように味をつけてたべる。

救荒食物については二宮尊徳は猛烈に反対している。尊徳はあんなものを沢山たべると毒が溜つて死んでしまうと言う。尊徳の言う植物は山菜や山草よりも、もつと酷いものない。あるものなら何でもたべる。いわゆる草根木皮で灰汁抜きも充分にしないで唯、腹の足しになる丈たべていたのだからいけなかつたのだろう。

古い本にわらびの粉は葛の粉に比べて腹持ちが好いから（消化が悪いので）なるべくわらびの粉をたべるようにした方が好いと、さもしい事が書いてある。

「小母さん。わらびはないの」

「ありますよ。沢山」

或年の五月、飯豊山から下りて来て泡の湯に行くトラックを交渉して一軒の商店に入つて待つていた。一寸した土産物もある。

「この裏の山に行けば沢山生えてますよ」

狭い店を見廻したが一向にない。

いた方が好かつたかも知れない。

中国の伯夷叔齊が首陽山でわらびをたべて栄養不良で餓死したと言うから葛でもたべて

ことである。大戦前、越後湯沢から苗場山に登ろうと外の川の小屋に泊つた事がある。その頃はまだなめこは栽培されず、自然のを採集してきて珍らしいものだつた。それを食事

丸山(一四八八m)

望月達夫

五月の連休には奥会津の山へ行くことが、ここ数年続いている。目のさめるようなブナの新緑に心を洗われ、風雪にたえぬいた巨木の疎林をぬい、タップリ残っている堅雪を踏んで、紺青の空にひときわはえる白い山頂へむかって、一步步く身をたかめてゆくようない山登りは、五月という季節がめぐりくるたびに、私の心をとらえてしまうからだ。

この五月上旬もまた、鬼怒川、山王崎、田島、駒止峠という旅程で会津の山地に入り、三日の午後伊南村の古町に宿をとつた。

四日は、晴れていたら早晩に出発して、丸山、大博<sup>だいはく</sup>多山<sup>たに</sup>を一日で登ろうかと考えていたが天候は案の定あまりよくないので、七時半頃の出発となつた。昨夜の雨と雪解けで増水のはげしい伊南川を渡ると、小塩の色の古い

藁葺屋根が行儀よく並んでいる。対岸の古町  
はかつての火災で殆んどの家が新らしいが、  
いよいよ丸山の、北方尾根へ一步を踏み出し  
た。

こちらはまだ古い趣きがこまやかだ。

小塩川の林道をたどると、路傍には残雪が現われ、カタクリの花が一面にさいていたり、フキのとうが顔を出して、ようやく春が来たことを告げている。が間もなく情けしらずの雨が落ちはじめた。九時頃まで前進したが、雨は一向に止みそうもないのに、あきらめて引き返すことになった。林からあまり遠くない出作り小舎まで戻って、モノを食べたりなどしているうちに、いくらか空が明るくなつてきたので、外へとび出してみると、雲がきていたところどころに青空がのぞいているではないか。谷の奥に目をやると、斑雪とブナの新緑にかざられた山肌が、しだいにはつきりしてきた。時計を見るとまだ十一時少し前、

それではもう一度行つてみようかと、急ぎルックザックの紐をしめなおして、再び沢の奥へむかって登りだした。ところどころ道に大きくわだかまる残雪を踏み、塩ノ岐川へ乗越す峠まで来て一服、ここで腹ごしらえをして

く尾根の北東面の豊富な残雪上に出て、ひたすら雪の上を登ることとなつた。枝沢には時々ブロックが落ち、近くでは大音響を伴つた底なだれの崩落があるような、雨水を含んだクサッタ悪い雪なので、われわれは出来るだけ尾根を選んで登り、一二二四m峰へは二時頃に辿り着いた。ブナの巨木に古い切りつけなどが見られる。そこを少し下りかけるころ一瞬霧がはれて、仰ぎ見るような高さに、丸山のおおらかな山頂が望まれた。どこからかツツドリの声もきこえてくる。それもつかの間、すぐまた霧がまいてきて、東方の一三六〇m峰はよく見えるのだが、丸山の山頂は二度と姿を現わさなかつた。

磁石で方向を定め、相変わらず雪の上を登るかなり勾配が急になつてきた。気がついたら樹林帯からも抜け出したらしい。急斜面が一気に伸びあがつて霧のなかに消えている。幸い雪はやわらかく、簡単に靴でけこめた。そ

うでなければアイゼンの必要な傾斜である。

そこを登りきつたところが頂上で、小さな雨量観測小舎がうずくまり、さえぎるものとて何もないのに、晴れいたら定めしそうれた展望が得られたに違いない。しかし濃い霧はわれわれに、せいぜい百メートル位の視界しか許してくれなかつた。だが、一旦はあきらめた山頂に、とも角立つことができた喜びは必ずしも小さくなかった。

出作り小舎から四時間二十分かかったので帰路の時間を考慮し、われわれは十五分ばかり山頂で休んで下りについた。急針面はグリセードでとばし、塩ノ岐川の峠まで一時間十分、そこからまた往路通り下つて宿へ帰着したのが六時三十分だつた。一風呂あびたあと夕食は、シシダケ、コゴミ、ワラビ、マイタケなどの山の料理のせいもあつて、何とおいかつたことであらう。

翌日は只見を廻つて帰京したが、谷奥には山桜やボタンキョウが満開といふこの季節でも、只見駅のホームの脇には、まだ二メートル近い雪が残つていたし、折りからの小雨

肌寒さがひとしおであつた。

(附記)こんな山へ出かけられる人も多くないと思うが、古町には旅館が三、四軒あるな

かで、われわれの泊つた亀屋は、親切で大変よかつた。主人は山のことにも詳しい。一寸紹介しておく。(一九七五・五・七)

黒金山へ登らざる西沢渓谷

ルムが全く送られていないのに撮影はしていだのだ。カメラの自信喪失。雲取小舎から上はまだ雪がかなり残つていた。

◇

### 三峰から雲取へ

宮城 恭一

四月二十六日(土)、三峰から雲取小屋泊。  
四月二十七日(日)、小屋を午前五時半に出て七つ石山を経て鴨沢に着いたのは午前十時頃、空が明るくなつて雨が止む。もう引きかえす気になれずそのまま帰京。

五月十七日(土)、黒金山から乾徳へ行く予定をあきらめて西沢渓谷入口のバス停へ着いた頃、空が明るくなつて雨が止む。もう引きかえす気になれずそのまま帰京。

武田信玄といふ武将は「かくす」ことが好きな人であつたようだ。信玄のかくし場といふのが方々にあるが、不動小舎には、みやげ物として「かくし漬」というのがあつた。買つてくれればよかつたと後で思う。

## 話に当ったうとうの路

久保孝一郎

孫さんの追悼山行をすました後  
の飛び石連休に、おいらくの山仲間三人と東吾妻に行つた。前夜から

の春の嵐で、初日の三月二一日はひきつづき雨、僕はポンチョをかぶり、スキーを抱えて家を出た。

コースは初日ヌル湯泊り、翌日吾妻小富士の据をまいて浄土平・由野地温泉泊り、翌々日箕ノ輪山・鉄山・安達太郎を登り帰京という予定。僕は昨年四月、三日目のコースを逆に歩いて、小富士・一切経・家形の山やまを眺めて魅せられた処である。

タクシーで土船（ここまでバスの便あり）

の先、入れる処まで頼んだが、その先の部落白津あたりで下ろされた（無雪期はヌル湯までの三時間半の歩きで、下半分は杉林、上半分は唐松林の中の車の通れる広い道で電柱が沿っている。

歩きだして一時間くらい、この一行の最長Iさん（六十八才）が今夜の酒の肴だと、少し見かけた露のとうをつんではポケットに

入れた。夜来の雨はすでに福島であがり、この頃は陽もさして春山らしくなってきた。然し途中の小高い岡では、西の方に福島市街・

阿武隈山地が眺められるが、東北の空に暗い大雲塊がおおって低気圧の進行を示し、それに吹きこむように風がだんだん強まってきた。リーダーのTさん（六十七才）はこれを見た。僕は家を出るまえ、水筒に日本酒を一日ろくを飲み、僕にも茶わんに一杯ついでくれた。僕は宿に着いて、水筒に日本酒を一日油ストーブで燶をして、どぶろくの後は、これをやることにした。その時Iさんが酒の肴にどうぞと、前述の露のとうの花をナイフで細くきざんで出してくれた。

展望が開けて、風はますます強まってきた。僕らは早く宿に着いて飲みたい一心でスキーを進めた。

三時、犬のほえ声に迎えられて古色蒼然たるヌル湯の宿に着いた。玄関のストーブを囲むと、お茶を出されたが、Iさんはそれでは汗と渴きがおさまらぬらしくビールを注文して僕達はそれにつきあつた。

Yさん（五十九才）はこれから一滑りするんだと宿の背後の尾根に登つて行った。僕は

風が強いが春光爍々たる宿周辺の風物撮影に一廻りしてきた。

四時頃にはYさんを除いた三人は湯につかり、丹前に着換えて、持参のつまみで一杯始めた。Iさんは最も酒好きらしく持参のどぶろくを飲み、僕にも茶わんに一杯ついでくれた。僕は家を出るまえ、水筒に日本酒を一日分の酒量限度二合位入れてきたのを室内の石油ストーブで燶をして、どぶろくの後は、これをやることにした。その時Iさんが酒の肴にどうぞと、前述の露のとうの花をナイフで細くきざんで出してくれた。

露のとうのあのほろ苦さは食膳に春を告げる第一の使者であることは言うまでもない。僕は学生のころ父の酒の相伴をしてその味を知つて以来、絶好の季節の酒肴と心得て、デパートの食品売場をのぞいて自ら初物を買つてくることもあつた。

今年はIさんの料つてくれたこれが初物であつた。しかし後で反省すると、この生食へ僕はいつもゆでて、あくぬきしたものしか食

経験はなかつた)がいけなかつたようだ。

メートルはだいぶ上つて談論風発したころ

Yさんがやつと、無事帰館し、食卓に現われた。夕食の料理の膳も運ばれ、Yさんは酒を

注文し、その酒を僕もつきあつて猪口で二杯目を口に含んだ時、急にさつき食したあの落のとうの油ぎつた苦さが胸をつき、眼の前がぐらぐらした。「しまつた!のみ過ぎだ」と僕は思つて、一座の者に「ダウンしました」と挨拶とも叫びともつかぬ声を出し、隣室に引き退り、畳の上に横臥した。

やがて宿の者が床を延べにやつてきて、僕を蒲団にひきいれてくれたが、ここで大失態! 僕は吐いてしまい、寝具をとりかえる世話までかけてしまつた。宿屋商売の経験のある僕は寝具を汚す客が一番嫌われることを知つてゐるので、宿の若い嫁さんに、「年甲斐もなく申訳ない」と言うと、彼女は僕の白髪を見て相当の高令と思つてか、「いえいえ、このお年で宿までさぞお疲れだつたでしょう。このお疲れでお酒が利き過ぎたのです。どうぞお気になさらずに!」と応え、僕の背中を

さすってくれた。僕はその若い女性の優しさを肌に感じて寝入つてしまつた。

明けて翌二二日、朝から陽がさして好天だ

が依然風は強い。僕の気分は頭痛もなくまあ

まあで何とか今日の予定コースは歩けるだろ

う。昨夜吐いて胃の中は空っぽだから、朝食

は普通にとつた。その食膳の漬け物の皿の中

に古漬けのなづぱに、昨夜と同じ落のとうの花が刻んでふりかけられてある。苦味のある落のとうは胃の薬だろうと思い、迎え酒なら

ぬ迎え落のとうをやつた。ところが、これも

どうもよくなかったと思われる。

出発の際、僕は嫁さんを見かけなかつたので、御主人に昨夜の非礼をわび、洗濯代です! 僕は吐いてしまい、寝具をとりかえる世話までかけてしまつた。宿屋商売の経験のある僕は寝具を汚す客が一番嫌われることを知つてゐるので、宿の若い嫁さんに、「年甲斐も

なく申訳ない」と言うと、彼女は僕の白髪を

見て相当の高令と思つてか、「いえいえ、こ

の年で宿までさぞお疲れだつたでしょう。

このお疲れでお酒が利き過ぎたのです。どう

ぞお気になさらずに!』と応え、僕の背中を

等の注意をしてくれた。主人二階堂哲三氏は昭文社地図の執筆者で老令だが山の人の風格

貫祿は充分だ。宿の前で主人を中心にして僕達は記念撮影した。

八時に僕らは宿を後にした。昨夜同宿の高

校山岳部O Bのパーティーラしい三十才代の

六人の一一行は少し前に出発して行つた。春光

で明るい疎林の中の歩き出しは気分が良かつた。やがて進路は小尾根の登りとなつて小富

士の鹿へと目ざしている。この辺は風もなく

陽はうららかで、セータ一枚でも暑くなる

春山スキー気分であつた。途中で先発組に追

い着いた。彼らは今夜吾妻小舎へ無人、但し

五月連休からはヌル湯から小舎番が入る由

に泊り、明日は一切経・家形・鳥帽子・東大

嶺を経て天元台に下ること、荷が多いが、

トレーニング不足らしく、僕ら高令層より遅

鳥子平からさきの車道から離れて幕川温泉に

至る降路を主人に尋ね、詳細に説明をうけた。

一時間半ほどして路は高原状に開けた灌木

の切り開きの路に出た。これまで処々赤い布

が枝に下げてあり、行く手の小富士を巻くあ

たりにもポールが見えるので、進路について

の不安はなかつた。しかしこの切り開きを出た処より俄然風は強まり地吹雪をともなつてきた。雪質もザラメから粉雪に変り、春山の世界から冬山のそれへと變つてしまつた。僕らは余計に着こんで防風衣をつけた。さつきまで輝いていた陽も雲り、小富士は七合目以上はガスに隠れ、低気圧が去つた後の冬型天候に急変するかに思われた。

どうもこの頃から昨夜のみ過ぎによる不調を感じ前途を不安に思うようになつた。

時どき出るゲップが、あの油じみたあくの強

い苦っぽい生の露のとうの氣のあるやつで、

また吐きたくなりはしないかという不安であ

る。

といつた按配である。この辺から雪は完全にクラストし、勾配がゆるいからシールをつけたり効率的だ。風は、通り路らしく、間断なく襲つてくる。若いころ四月の富士に二度行つたが、あそこの風は独立峰のせいか息づくよ

うな間断があつたと記憶してゐる。ここは切れ

目がない。勾配がゆるいからそう恐くないが、

急だつたら大変である。

から先はポールはないが、一木もない

小富士の山腹を大体の見当をつけて、登り気

味に回りこんで行く。風は僕らを拒否するか

のよう猛り狂い油断していると吹き倒され

てしまう。老年組も、重荷を担いでいる壮年

組も、みな何度か吹き倒され、その時は不貞

腐れたように座りこんでノロノロと動作した。

Yさんはどうしても独り下りなければそ

ら吾妻連峰に入山した登山者がノ河原で強

風に吹き倒されたのがその物語の不吉な発端

であったこと等を思い出し、急に弱氣づいて

リーダーのTさんに「この風で大丈夫ですか

？」と問うと、涼しい顔で「いや大丈夫です

よ！」と軽くいなされてしまった。



不調から、以前読んだ山の遭難物語で五色かきり見えぬが地形は頭の中で組み立てられる

と、いはうと、Yさんはシールの具合が悪いらしく

遅れ気味である。僕は胃のむかつきと締具の

不調から、以前読んだ山の遭難物語で五色か

きり見えぬが地形は頭の中で組み立てられる

と、いはうと、Yさんはシールの具合が悪いらしく

遅れ気味である。僕は胃のむかつきと締具の

不調から、以前読んだ山の遭難物語で五色か

き

の旨Tさんに連絡してくるから、そこで待つていなさいと言い捨てて、登って行つた。しばらく一休みして、僕自身がリーダーのTさんには断つてくるべきだと思い直して、また登り始めた。この頃の胃の不快感が最高だったようだ。

ほどなくTさんの所まで登りついた。風は依然強く二組計十人、みな難行苦行している。そして最年長のIさんはシールの具合が悪く遅れ気味である。ここまで来てしまっては、僕は考え直してとにかく吾妻小舎まで頑張ろうと思つた。このあたりから杭にロープを張つて谷へ下るのを阻止する導標が、雪に埋もれながら、それとなく判別できるほどに見え隠れするようになつた。これに励まされてピッヂをあげると「淨土平」への矢印のある標示板が現われ、小富士巻き路は八分通り済んだ工合いで、風も幾分弱まつたようである。雪がとばされて露わな岩の蔭に枯草がゆれているのが見える。こんな強風地帯でも、風蔭でさえあれば、草は育つものだなど妙に心をうたれた。

この標示板のところで一行勢揃いして直ぐ歩き始めた。ガードレールが処々現われて車道がジグザグに登っている様子が深雪ながら分るので、直登する。この辺では雪質は幾らか重たい三月の新雪で、ガスって空から雪が直下してくる。強風地帯は過ぎたが、天候は完全に冬型に転じ、午後からは相当の降雪が見込まれた。僕は、早く吾妻小舎にかけこみたい一心と、また締具が思いきりよく上るので、トップを登つていた。するとガスの中に、ボーッとレストハウスらしい二階建の鉄筋コンクリート建物が見えた。足もとを見ながら見つめると、ただガスだけでそれは認められなかつた。僕は幻想かと疑つたが、斜面の工合いで見えなかつたのだろうと自分の心を納得させた。それから一、三分で、今度は本当に確認できた。しかもその直下に二条のショールさえ認められたので、これは吾妻小舎の入口には数本のスキーが林立し、数人の宿泊者がいる様子だ。キャンプ場らしい平坦地を過ぎ、また車道に入った。この辺から予想通り風雪が激しくなってきたが、幸いに追い風であり、さつき耐風訓練ずみなので、特別辛い感じはない。そしてタンネの林間は何かにも人が入つていて、下の窓みでTさんとYさんは遅れているIさんをしつとり落着かすものがある。鳥子平を

んを待つた。僕は、早くハウスの状況が知りたく「一足お先に失礼！」と挨拶して、建物に向つた。ハウスは予想していた通り、一階部分は雪に埋まつて入れず、風当りの少い場所を見つけて、リュックを降ろした。腕時計をみると十二時少し前、昼食時だなと思つて、まず小便をした。

他の三人の到着は思ったより遅れた。聞けばIさんのシールを完全に張り直させた由、以後彼のシールは快調となつた。

昼食以来あの灰汁ぼい苦いグップによる胃のむかつきはおさまり午後の予定コースを踏破することができた。先を急ぐTさんは昼休みも三十分そこそこで出発を号令した。吾妻小舎も立ち寄らず見過しただけである。小舎の入口には数本のスキーが林立し、数人の宿泊者がいる様子だ。キャンプ場らしい平坦地を過ぎ、また車道に入った。この辺から予想通り風雪が激しくなってきたが、幸いに追い風であり、さつき耐風訓練ずみなので、特別辛い感じはない。そしてタンネの林間は何かにも人が入つていて、下の窓みでTさんとYさんは遅れているIさんをしつとり落着かすものがある。鳥子平を

過ぎた辺で「今日のコース中最高地点です。東吾妻山登山口はここからです。これから殆ど降りで、登りは野地の手前わずかだからシールをはづしましよう。」とTさんに声をかけられ、僕らはやれやれと思つた。

スキー技術は四人とも同じ程度で降りの足並みは揃つた。幕川温泉への降路はTさんのリードよろしく沢筋を右手に廻り込むようにして快適に滑降した。ここも古風な湯治場といつた感じで、冬期留守番が居る様子。時間があれば暖と茶の馳走をうけて彼の無聊を慰めたり、冬ごもりの面白い話でも聞きだしたいところであるが、直ぐ出発した。時刻は三時すぎ、雪の山中は急に冷えてきて、雪質も完全に粉雪である。

そこから車道沿いの電柱を目標に、斜面を下り荒川渓谷側、山腹の巻き道となつた。谷側の道はかなりラップセルで、これまでトップだつたTさんに替つて、他の三人も交互にトップとなりラップセルした。

電柱の番号の変るのが僕らの良い進度計となつた。鷺倉温泉はまだかまだかと気はせく

がスキーツアー、スキーワンデルングの面白味である。Tさんは「野地温泉はもう一頑張りだ」と激励して、暗くならぬうちにと先を急ぐ。この高原状の道に出てから、またしても叩きつけるような大風雪となつた。しかし追い風でもあり、三月の下旬となれば日没時間があるし、各自一・二月の厳寒期山行で寒さにはなれ、電柱の目標、雪明りの助けもあり、ゴール間近かの安心感もある。

一風呂あびて夕食を待つ間に僕は山草に造詣の深い Iさんに、蕗のとうの生食は体に悪いのではないかと尋ねたが、熱い味噌汁に入れて往々食することあり、自分も生食して異常ないのだから、別に差支えなかろうと回答された。とにかく今日の行程で、僕より十三才年長の Iさんが、オーバーズボンもなしに不安気なく同行されたことに敬意を表すると

ともに僕自身の所行が恥しく思われた。またTさんの周到綿密なリードにも敬服した。夕食前に迎え酒をのんだことはもちろん、吹雪の夜を楽しく暖くこの宿で過した。明ける三日目はガスが深く、僕らは前日のかなりの強行軍に満足してしまって、ハリキリボーキ（？）のYさんは残念がつたが、予定コースを割愛し、車道を土湯へと下った。

が、一時間半ほどでこの谷側の道を脱し、高原状の所に出て、やっと吹雪の中に立つかなり大きな木造建物を見つけた。ここは無人のようで、無雪期の自動車の通る時期では何の感概もなく通過してしまう処だろうが、ここがスキーツアー、スキーワンデルングの面白

期出入口を探すのに少しくひまどつたが、僕らはようやく玄関口の石油ストーブの周りに腰をおろすことができた。五時半到着、九時間半の行程だつた。僕の愛用している孫さん形見のキルティングコートはびっしりぬれていた。

帰京して、父と雑談の合間に、たまたま父は「雪の下から出たばかりの路のとうは苦くていけねえ！」と言つたので、果して僕は遺伝体質をうけて路のとうに当つたのか、ま

た僕の飲み意地が汚たなかつたのか（前週の末孫さんの追悼山行では僕はワインと日本酒を二合以上飲んで、翌日の山行に異常なかつた）読者の判断におまかせする。

## 聖岳・赤石岳

山本健一郎

We viewed the mist, but missed the view.

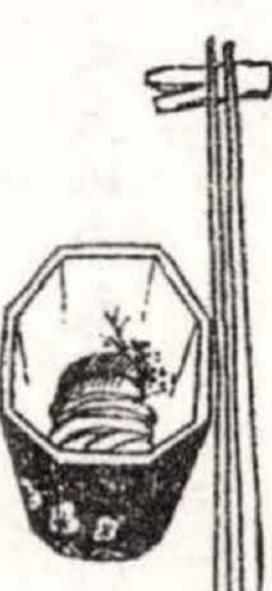
— W. Weston

南アルプスは北部しか知らなかつた。はじつまり赤石山系の、呼称のもとなつてゐる南アルプスは北部しか知らなかつた。はじつまり赤石山系の、呼称のもとなつてゐる南アルプスは北部しか知らなかつた。はじつまり赤石山系の、呼称のもとなつてゐる

南アルプスは北部しか知らなかつた。はじつまり赤石山系の、呼称のもとなつてゐる南アルプスは北部しか知らなかつた。はじつまり赤石山系の、呼称のもとなつてゐる

つしやる予定かおうかがいしれところ、聖岳から赤石岳そしてできれば悪沢岳あたりまで行きたいのだということ、一も二もなく是非ご一緒にとお願ひした次第である。

面倒な準備一切は、望月さんとJACの横山厚夫氏夫妻、山田氏とその友人中村氏、同静岡支部水野氏などの皆さんが全部やつて下さり、小生は自分の荷物だけ持つて、山姿がすこし気はずかしい新幹線で、静岡駅へ八月十四日の朝かけつけた。バスはすぐに静岡の市街を北にぬけ、安倍川沿いに遡つていく。この辺、海も近いのに河原でテントを張つて泳ぐ人達で大変にぎわつてゐる。バスはやがて安倍川とわかれ井川林道に入り、一、二〇〇米の富士見峠の登りにとりかかる。さすが梅雨の最中であつたろうか、お邪魔したオニ涼しくなつてきた深い木立の中のつづら折りを登りつめた峠は残念にも雪の中、山は一



つも見ることができなかつた。峠からは三十

以下の一行にどうしてもついていけない。ま  
である。

分ほどで井川湖へおりたち、終点の井川本村で、昼食をすませ、水野氏手配のトラックで櫛島まで林道をゆく。二時間ほどでついた櫛島は、意外にきれいで感じの良い東海パルプの小舎があり、のんびりくつろぐことができる。このあたりの大井川は、八月というのにまだ

水も豊富で立派な流れである。盛夏の午後とはいえ、ここまでくると、空気もひんやりして甘く、一度に元気が出てくる。

まよとばかり、マイペースで登ることにして、適当に息を入れはじめたらきりがなく、なまけぐせがついて一〇分もすると腰をおろす始末、本当に南アなんかに来るもんぢやなかつたなどと後悔しながらも、段々ひらけてくる展望にはげまされて滝見台まで辿りつき、昼

夏山システム最中のこと、可成り沢山のテントが小舎の周辺を埋めにぎやかである。小舎の方も、大分のご老体や若い女性の一人旅など様々の人種で一杯である。夜は満天の星シユラーフにもぐりこむなり、たちまちねてしまつた。

水も豊富で立派な流れである。盛夏の午後と  
はいえ、ここまでくると、空気もひんやりし  
て甘く、一度に元気が出でてくる。

翌十五日、六時半に樺島を出発する。昨日  
の道を四十分ほど戻り、聖沢橋のすこし上流  
の急斜面につけられた道を登りはじめる。丁  
度朝日が当りはじめた斜面を、調子が出ない  
ままに大汗かいて四十分ほど登ると出会所の  
小舎で、冷たい水に一息いれることができた。  
あとは、聖沢を左下に見下しながら、山腹を  
降り気味にへつり、吊橋で聖沢を渡ると、急  
な登りが待っていた。トレーニング不足の脚  
にはこの五〇〇米ばかりの登りは馬鹿にこた  
えた。息が続かず汗は流れて眼にしみるし大  
変な苦行となる。軽々と登っていく望月さん  
でからは、まづまづの調子になり、聖沢右岸  
の急斜面につけられた道を登ったり、降りた  
りしつつ、ようやく源流をおもわせるおだや  
かな流れとなつた聖沢沿いの林の中のゆるや  
かな登りをたのしむうちにあたりがひらけて  
きて、聖平の小舎が見えてきた。このあたり  
は、ひろびろとした草原に見えたが近づいて  
みると一面に、苔の生えた太い、くちはてた  
倒木が散乱して見るも無残である。これも開  
発のなせる仕業かとおどろいたり怒つたりし  
たけれど、小舎番にきくと伊勢湾台風によつ  
て、このあたりの原生林が皆吹き倒された結  
果、深い森の中にあつた小舎も今では遠くか  
ら良くみえるようになつてしまつたとのこと

十六日、今日は百軒洞まで聖岳をこせば大したことはなさそうな楽な行程の日、五時半に小舎を出て、本邦最南の三、〇〇〇米峯を目指しビックチをあげる。望月さんは念願の聖岳登頂の日でもあり張り切って先頭に立ち、小生も息苦しさがとれ調子が良い。昨日苦しかったのは空気が濃すぎたためだろうが今日は丁度小生向きの薄い空気の世界に入ったようだ。しばらくは林の中の眺望にめぐまれない。登りがつづき、次第に木の背丈が低くなると聖岳が眼前にみえてくる。ふりかえると上河内岳・茶臼岳は仲々立派で、こちらと異なり人の列が見えないのも好もし。聖岳西面の荒々しい崖を左手に見つつ、次第に急になつてくるガレをデッグザックに登るともうそこ

が頂上だった。まだ八時半、斜にさしこむ陽光にこれから辿る兎岳・中盛丸山・大沢岳の綾線、今宵の宿りの百軒洞、そして眼前に深くきれこむ赤石沢をへだてて、本当にドッシリとした、均勢のとれた姿の赤石岳、これに重なりちょっぴり姿を見せる悪沢岳などが手にとるように望まれる。時間もあるので、ほれぼれするような赤石岳をながめつつ、大井川へ向ってつき出した頂稜の一角、奥聖岳に往復する。この往復は今回の山行でも印象に残るものであつた。ゆるやかな稜線を形づくる岩石の間に敷きつめられた高山植物のか一ペットは、もう花の盛りをすぎたとは言え、その名残りをとどめ頂上のさわがしさもなくこの山の素晴らしい景色を満喫させてくれた。この散策のあと、兎岳の方へ百米ほど降りた人気のない草地でゆっくりと休憩する。赤石岳をあきずに眺め、これからこえる兎岳・中盛丸山を指さして一時をすごした。

ず、続く兎岳への登りもそろそろ暑くなつてきたなかを汗を絞らなくてはならない。兎岳の気持良い頂上でまたゆっくり足を止め、小兎・中盛丸山と続く小さい面倒な昇降をくりかえすとあとは、百軒洞への展望のきかない急な悪路の降りが疲れた身体にはとても長く感じられた。夕暗せまる百軒洞の小舎は大変な混み様である。あまり収容力のないところへ大勢がつめかけるので仕様がないことかも知れないが、乱雑にゴミが散らかり、きたないことこの上もないキジ場と相俟つてあまり印象の良いところとは言えなかつた。

台風の近づくというニュースも入り、風や雲の動きもあわただしい。悪沢岳はあきらめて、赤石岳から樅島へ明日中におりることにし早々と寝る。

翌十七日は高曇りの空に不気味な朝焼けで  
むかえた。六時には歩き出し百軒洞のキャン  
プ地をすぎ大沢岳とのコルに辿りつくと意外  
にも素晴らしい眺めがあらわれた。高曇りの  
雲の下に斜に朝日がさしこんで、はるか白馬  
槍・穂高あるいは白山から、眼下の伊那谷ご

しに、中央アルプスが大きくどっしりとそびえている。百軒平に登りつけば、更に南アルプスの白根三山、甲斐駒・仙丈などが重なり合ってそびえ、その手前に、塩見岳の特徴ある山容がグイと肩を怒らしてそびえている。

赤石岳の登りは広いガレた正面の斜面につけられている。この斜面にかかるころから、霧が出てきて視界が閉ざされてしまった。ポンポン雨のふり出した中を、この山行最後の項目として登った。狭からず広からず、丁度良い感じの頂きだったが、生憎と一面のガスで何も見えない。○○大学ワンダーフォーゲル登頂記念と書いたプリキ板があちこちにとりつけてあり感じが悪い。風も寒く十時から三十分ほど滞在して早々と下山の途につく。明治二十五年ウェ斯顿の一行が登頂したときもこんなだつたのだろうかと、霧の頂上をふりかえり、雨具に身をかため降りはじめた小赤石の近くで久しぶりに雷鳥の親子を見ることができたのはこの霧のおかげだろう。

すでに、七〇〇米の登りをこなした身に、赤石小舎を経て椹島までの二、〇〇〇米余の

降りは長く感じられた。降り出した雨の中、うき安さも手伝い適当にばてながらゆっくりぬかるむ道に足をとられつつも、満たされた心に浮き浮きしながら、降つていった。

### 僧ヶ岳から剣岳へ

藤本 敏行

四月にしては冷たい雨の日の続いた週の金曜、前神と二人で上野を立った。  
四月二六日、快晴、宇奈月——、四五〇m付近。

僧ヶ岳への登りはスキー場から始まった。

シーズンが終わり、リフトもはずされた人影

のないゲレンデは朝の明るい光の中でも馬鹿に物寂しい光景である。だが、ひとたび歩き出せばそんな感傷はどこかへ吹っ飛んでしまつた。天気が良いのは結構だが日影のまるでないゲレンデの残雪上を一直線に登るのは猛烈に暑いのだ。睡眠不足と五年一人だけとい

だましだまじ登つた。それでも黒部の谷は次に一時間頑張って一四三一Pを越えた辺で泊ることにした。ボトル切りから始まる幕営の用意も天気が良いと楽しいものだ。

四月二七日 雨 幕営地——幕営地

夜半から雨が降り出しが、予期していたことなので朝寝を決めこむ。十時頃から大分小降りになつたので出発したが、ガスが濃い

上に雨もやみそうにないので十三時過ぎ、またツェルトを張つてしまふ。雨は夕方になりようやく上がり、月と富山の灯が美しい静かな夜となつた。

四月二八日 曇後快晴 幕営地 僧ヶ岳

——駒ヶ岳——サンナビキ山南コル

僧ヶ岳へは三十分程で着いた。さすがに雪

も多くなり、処々急斜面の藪漕ぎをさせられ

るが大体残雪上を歩ける。黒部側に張り出し

けない。だが前を行く前神は藪の中だとキスリングのくせにやけに速い。毛勝の登りは見事な階段状のステップがあり問題なし。頂上へ飛び出すと風がもろに吹きつけ寒い。白山の方には黒い雲堤が連なり、上空の雲もだん

登りがいやに急に見えた。先行パーティがあるのでルートファインディングの必要はないが、少しでも連休の混雑を避けようと北方稜線にやつてきた僕たちには興醒めの感がしないでもない。十時頃から青空が広がりました。や暑い一日となつた。十五時サンナビキ山着。

コルへの下りは両側とも切れ落ちており、稜

線上は針葉樹と灌木の密藪でへたにザックを引っかけると振られて落ちそうないやな所だ

った。

四月二九日 曇後雨 幕営地——毛勝山

——釜谷山——猫又乗越

天候悪化は時間の問題なので何としても毛勝は越えてしまおうと心に決めて出発。ウドの頭付近は、やはりやせ尾根上の藪漕ぎを余儀なくされ、しかも処々昨日の晴天で融けた雪が凍っているのでとてもじゃないが速く歩けない。だが前を行く前神は藪の中だとキス

だん低くなつてくるようだ。早々に出発し天気と競争で釜谷山へ向つたが、釜谷山頂でとうとう大粒の激しい雨が降ってきた。猫又乗越へ走り下り、びしょ濡れになりながらツェルトを張つた。

四月三十日 曇後晴 幕營地——猫又山——赤谷山——大窓

強い風雨は明け方に收まり、深いガスの中八時出発。猫又山を越え、ふうすぐブナクラ乗越といふところでトレースが消えてしまつた。冬に使用したと思われるフィックスが左手の斜面に見えるのでとにかく下ることは判るが、足下は急な雪壁でとても下れそうもない。しばらくうろうろしたが、結局灌木にかかつたザイル・シューリングを見付けてようやく全てが理解できた。何のことではないアップザイレンだ。しかし今にして思えば、いくらガスつているとはいえ、やたらトレースばかり辿つていたからあんなことになるのだ。岩場で知らぬ間にハーケンを捜しながら登つている自分に気付いた時のような不満を感じた。赤谷山頂へ着く頃（十二時半）薄日がさし

てきた。赤禿、白禿の通過は状態が悪ければかなり時間を喰いそなうだが、天候は回復に向つてはいるし、二人ならばどこででも泊ることができると、白萩山でもたいして休まず先を急ぐ。もろい岩稜と雪稜が交互に現われる。

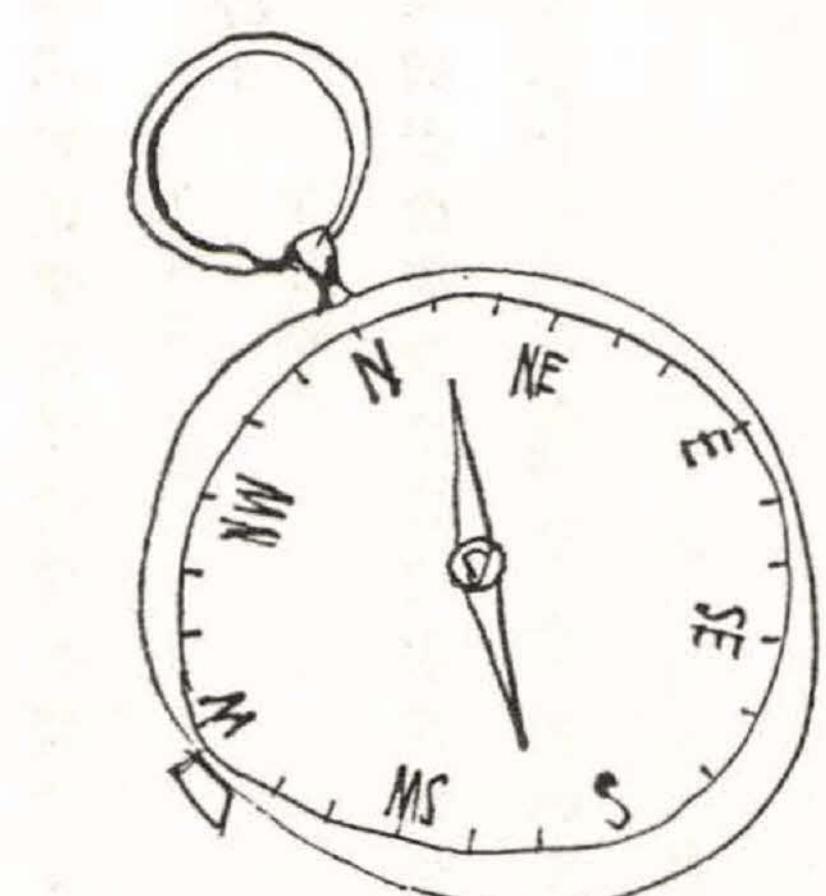
突然ガスが晴れ、剣がその一角を現わした。わずか一日見ない間に随分大きくなつてしまつたものだ。青空はどんどん広がり、後立山窓着十五時半。赤谷尾根から、或いは白萩川から入山したペーティが揃いも揃つて昨日の雨で濡れた物を岩の上に広げている。僕たちもそれにならう。いかにも五月の雰囲気だ。

三の窓への下りは立派なステップがあるが如

何せん急なので裏返しなつて慎重に降りる。丁度小窓王を登攀中のバー・ティがいて石を落とすのには参つた。三の窓はクライマーのテントだらけで、チンネの硬く乾いた岩の感じからしてそのごく都会的な雰囲気がすでに北方稜線といふ名の持つイメージにはそぐわなかつた。突然ガスが晴れ、剣がその一角を現わした。穴だらけの池の谷ガリ

いといふ感じがした。一を登り頂上へと歩む。十四時二十分頂上着。鯉のぼりがたつていて、人間だらけで感激は薄いが、さすがに振り返ると毛勝も遙かに遠ざかり、わずか数日でよくも歩くものだと妙に感心した。下山路は別山尾根をどんどん歩き、室堂に着いたのは十九時だった。

——剣沢——室堂



剣へ立つ日の朝は快晴で明けた。大窓の頭池の平山と岩の脆い箇所があるがさしたる問題もなく小窓への下りにかかる。凍々氷化しているがアイゼンを着ける程ではなく、灌木とフィックスを頼りに強引に下つてしまつた。

赤谷山頂へ着く頃（十二時半）薄日がさし頼つて登り切る。剣尾根の側壁が圧倒的だ。



とで、その夜の部落会の際に供えてもらつたが、こんな話しも、どんどん都会化が浸透しているとはいえ、まだ残っている、素朴な山村らしいエピソードだと思う。

(中島記)

### 「筠沢の夜」

江藤淳の漱石とその時代の明治三十三年に「その頃五高校長中川元は仙台の二高校長に転補され、かわって教頭の桜井房記が校長に任じられた」とあり、夏目金之助は同年四月教頭心得となり、六月英國留学発令、九月横浜を出帆した。

中川夫人に伺つた処、元氏は父君であり、仙台へ赴任後間もなく孫さんが生れたのである。又夫人は発見された三月二十二日を大切にしたいと思いますと言わた。これは昭和四十七年で共に子年だから丁度六廻りというわけである。元氏の事績については御長男が目下調査中の由である。

湯本平のバス停で中川の方と別れ、改修

工事の続く狭い道をバスはノロノロと進み五時半西丹沢の終点筠沢山の家に着いた。先年社の場所がら彼らは赤提灯など期待せず、然るべきクラブへ十人も連れて行けば数万円の大失費で痛い。彼らは学業、アルバイト、山健在である。

十畳の部屋にストーブを囲んで明日の相談をしているうちに、幹事の骨折りで食事も豊富に準備され、思い出やら何やらを肴に杯を交わしたのでその話題を拾つてみる。

A 孫さん追悼記念碑建立の話。今まで山で遭難死した山岳部員には必ず建立されているのだから、苟も山岳部・針葉樹会の創設者たる孫さんにも建立すべきだ。場所、様式等今後の課題にしよう。

B 孫さんの風格。まことに一橋を生き甲斐

とし、先輩の中には一寸近づき難い方もいるが、孫さんはそうでなかつた。

C 国立の部屋の修復の問題。

D 卒業間際に滝谷で遭難して体の自由と声を失い、母親に世話をされて十年になる某会員の慰問。中島君たちが本を買って見舞に行つたそなが、今後慰問の費用捻出に会基金の利子を経常利用できまい。

E 現代学生気質。「学生が飲みに来るが会社の場所がら彼らは赤提灯など期待せず、然るべきクラブへ十人も連れて行けば数万円の言をきつかけに批判論に花が咲いた。O Bとして淋しい限りである」との某君の発言をきつかけに批判論に花が咲いた。

(鈴木記)

### 「大野山—湯本平」

宮城、久保  
佐藤、伊藤

三年余前の十二月十五日、僕(久保)は同じコース(鍛冶屋敷—子育地蔵—大野山)の捜索班長として通つたが、今回は孫さんが何故ザワツン沢に踏みこんでしまつたか、その辺の理由解説の手がかりでも得られればといふ考までまた歩いてみた。

頂上手前、車道との分岐点に湯本平を矢印で示す立派な標柱があり、これは確か三年前もあつたと記憶する。頂上からの直降下は茅

の茂みと急勾配で考えられない。やはり牧柵のきれる辺まで、これに沿つて降り、右手尾根をからむ車道は、折角山路を歩きに来たと

いう気持から眼下に見える中川温泉行きのバス道に誘われて、これを避け、その辺から直降下したものと推定される。そして孫さんの携帯地図は僕と同じ昭文社昭和四十三年発行第二版の「丹沢」図であるに相違なく（以前丹沢に三回同行して、僕はこれを確認している）、これに湯本平下山路が記入されていなことが最大限因と考えられる。その後の版では右登山路が記入されていることが宮城氏携帯のもので確認できた。

（久保記）

春あした雪の富士据元中川忌

根本大吟作

頂上昼食時、佐藤氏のラジオで東京は時々小雨で寒い天氣だと知ったが、こちらは強いて難を云えど、春霞の感じで富士も南アも見えないこと位。矢張り日頃の行ないが物を云う。

（伊藤記）

## 中川忌

「畦ヶ丸行」鈴木、宮城、久保

冬涸れの儘なる峠の梅の花

三月や近山なれど険しきか

石のみの川間をかぎり中川忌

耳をさすような冷たい風、高ぐもりの陰鬱な空。筍沢山の家を朝七時半に出たときは、あまりぞっとしない天氣であった。昨夜山の家に集つた九人のうち畦ヶ丸を希望したのはこの三人であつた。久保君は大群山に行きたいようであつたが、他に同行者がなかつたので小生の誘いに乗つてくれた。昭和四十七年七月十二日の水害で最も痛手を受けたのはこの付近の沢で、畦ヶ丸は一般向きのコースで無くなつたと聞いていたが、その後すつかり整備されて迷うような所は無くなつてゐる。

中川川本流に沿つて自動車道を歩いて暫く

して立派な西丹沢自然教室に着き、左へ橋を渡つて西沢に入る。水害のあとが随所に残つていて流されて來た巨岩、根こそぎの倒木が無数にある。指導標は完備していて迷わずに歩ける。十時頃からは空が晴れて來のどかな山歩きとなる。「善六のタワ」に着いたのは十一時頃か。ここまでに鎖場とかなり悪いガレ場がある。善六のタワからの尾根沿いの

登りには日陰に雪があつて滑りそうになる。アイゼンは持っていたが、着ける程のことも

「檜洞丸」

佐藤、池知

なく進む。昼前に頂上に着くが、樹林のための展望はきかない。五分程下ると避難小屋が

六時起床、風音が激しい。尾根は相当な吹きか。

老人一人、女性一人、混合一組を抜いて一面  
残雪の頂上に立つ。時に十時五十分、予定よ  
り二十分の延着。犬越路より若い男性二人、  
ツヅジ新道より女性三人組。

あり展望が開け、富士山がよく見える。小屋

若手池知君の案内で、七時篠沢山の家を立

北斜面は一面の雪氷で滑落の危険あり、犬

小屋は立派な小屋で、ドラムancockストリップが

つ。先年の台風で河原の山小舎は流れ、一部

越路の下りはアイゼン無しでは無理。檜洞丸

あり既に数人の先客が居た。その一人に自然歩道の指導員というよく喋る若い男が居て、ここに数日泊つているとのことでむさくるし

家が助かり、神木の靈験灼かなりとの新聞記事を思い出す。河原は荒れて広大となり、昔の面影はない。下山後アルバムを見れば昭和

時間強の强行計画を考えていたが断念して、ツツジ新道経由にて四本歯のアイゼンも快適に、のんびりと下山する。

い上に、畦ヶ丸から大滝峠への下り道の地図  
が間違っているから直してやろうとおせっか  
いをやくので不愉快になつた。

三十七年五月十三日、会社の旅行を利用して  
独り中川温泉より檜洞丸を往復している。

途中の展望台では富士の全景が眺められ、快晴無風となる。河原で大休止、昼食。山小舎二戸落石で倒壊。筠沢バス停午後二時、中

一時間程小屋で休憩して大滝峠へ向う。大滝峠からステタローザへの下り道は水害で荒廃したため、大滝峠より畦ヶ丸寄りに新道が開かれていて、往復車票もよつとつく。

根筋は残雪がアイスバーンになつて滑り易い  
白崩れの頭では富士は中腹以下の眺望、前回  
は快晴に恵まれ素晴らしい富士の景観を撮つて

川温泉まで下り、二時四十分のバスにて帰る  
(佐藤記)

ステタロー沢と鬼石沢の出合に立派な避難小

昨年九月岩手山登山の際、フィルム捲き上

舎があつた。水害にもやられなかつたらしい  
一氣に下つて三時半には中川川本流に沿つた  
自動車道に出る。持参のウイスキーを飲んで  
いると十五分程して西丹沢発のバスが来た。

げのレバーを紛失し（古カメラで部品なしとか）、セメンダインで自己修理したが、右手が不自由でカメラ操作に難渋の上、再び紛失して池知君の見合いの写真が撮れず残念。

孫さん御冥福お祈りの機会には檜洞丸をと  
考えていたが、一週間程前のドクター・チエツ  
クで血圧の注意を受け平常化まで諸事自重を  
求められた。——このことを昨日先輩に話し

「犬越路」

通  
口

孫さん御冥福お祈りの機会には檜洞丸をと  
考えていたが、一週間程前のドクター・チエツ  
クで血圧の注意を受け平常化まで諸事自重を  
求められた。——このことを昨日先輩に話し

(宮城記)

たところ夜小屋でふとんを敷き終った上で根本さんから毎朝やると良いよと、体操の実技を指導して貰い又宮城先輩からは世の中は俺が中心に廻っているという考えに徹すれば血

圧は降りるという有難い精神訓話を戴き夫々に一理も二理もあることとかみしめて味った次第一かくして本日の小生の山行は比較的楽なコースとして一度は越えてみたいと思つていた犬越路の道をとる。

筍沢山の家発七・三〇、畦ヶ丸に向う鈴木さん、宮城さん、久保さんの一行と西沢の出合で別れ未だ春の訪れが感じられない寒々とした路を誰にも会わず進む。用木沢にかけられた場違いな感じの立派な鉄橋を渡つて犬越路一〇・〇〇着、単独行の人が二人峙にいた。無人だが、がっしりした小屋がある。三十分休んで出発。北側斜面になるので雪が比較的多くところどころクラストしている。スリップ注意し乍ら下る。途中昼食して長者舎着十二・〇〇。

丹沢も今の時期にこの辺りだと非常に静か、午後から日も照り出し春の気配の山麓を更に二時間半、東野までの道程はウンザリする程

長かつたが、昨秋以来久し振りに山の空氣にひたり得たことを感謝しつゝ、ガラガラ空いたバスにゆられ中央線藤野駅についた。

(樋口記)

### 針葉樹十四号について

現在、学生を中心に針葉樹十四号の発行準備が進められています。『最新号』の十三号が一九六四年に出されて以来、十余年の空白があります。ヒンズークシユ遠征をはじめとする一橋山岳会の十年

の流れをここら辺でまとめておかないと、貴重な記録が散佚する恐れもあります。

新号の編集にあたり、過去の針葉樹を参考にしたいのですが、山岳部には一、六、七、十二号が揃つておりません。これらの号を部に寄贈もしくは貸与していただける方がいらっしゃいましたら、左記まで御連絡下さい。

入金	中川家より寄金	三〇、〇〇〇円
	近藤会員より寄金	五、〇〇〇円
	計	三五、〇〇〇円
出金	生花・酒肴	一一、一三〇円
	山ノ家追加酒代	一、五〇〇円
	差引残計	一二、六三〇円

右残金は遭難対策基金へ繰り入れた。

▽一五四 世田谷区弦巻 5-16-8-30  
(電) 426-12559

前神 直樹

## 1974年山行表

### 山崎 拡

- 1月3日 単独  
大山。恒例の初詣。
- 2月11日 単独  
檜洞丸。縦走のつもりが積雪のため果さず、日帰り。
- 4月14日  
丹沢三つ峰。大倉一塔ヶ岳一丹沢山一三峰一宮ヶ瀬。
- 4月30日～5月4日 単独  
立山・剣。室堂—の越—立山—剣沢(泊)—剣岳—室堂—山田山荘。
- 7月31日～8月3日 久保  
茶臼岳・聖岳。静岡一畠薙一横窪小屋(泊)—茶臼岳—上河内岳—聖平(泊)—聖岳往復—聖平(泊)—畠薙。
- 11月2～3日 社員3名  
丹沢主脈縦走。大倉尾根—蛭ヶ岳(泊)—檜洞丸—篠沢  
その他、月に1、2度箱根、丹沢方面など日帰りで……。

### 藤原朋信

- 2月(1日) 丹沢 夜間登山  
塔の岳—蛭ヶ岳—姫次—長者舎。
- 3月(2日) 丹沢 小屋泊  
篠沢—犬越路—白石峠。
- 6月(3日) 北アルプス テント  
上高地—槍ヶ岳。横尾—蝶ヶ岳—徳沢。
- 7月(4日) 北アルプス テント  
内蔵助平—真砂沢—剣岳。別山乗越一大日岳—称名。
- 8月(1日) 丹沢 日帰り  
勘七ノ沢。
- 10月(3日) 北アルプス 小屋泊  
槍沢—槍ヶ岳(友人の結婚式を槍ヶ岳山頂にて実施)

## 会費納入のお願い

六月一日から五十年度が始まりました  
ので会費の納入をお願いいたします。

○昭和十年卒業まで 三千円

○同十一～三十一年 五千円

○同三十二～四十年 四千円

○同四十一年以降 三千円

送金先

○銀行振込 三菱銀行丸の内支店

普通預金口座

針葉樹会 ○○二一 四三八九五二〇

○郵便局振込

東京一八三四五八 針葉樹会

○現金書留

三鷹市下連雀二一四一十二 ▽一八一

中村雅明 宛

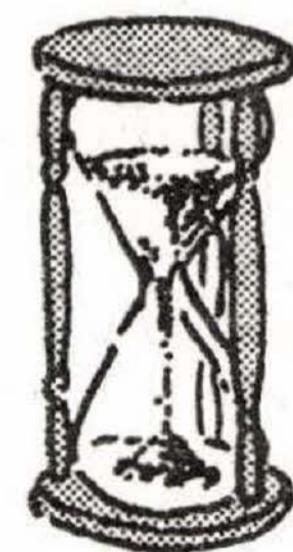
次号からの原稿依頼は往復ハガキで  
たしますので、身辺雑記、書評、隨筆な  
ど御気軽に寄せくださいるようお願ひし  
ます。

(井)

### 編集後記

四十三号をお届けします。

これで四回、最低責任イニシエイ  
トをなんとか果したわけですが、昔  
の会報と比べて内容にバラエティ  
を出せていなかつたことを反省し  
ています。二年目からも（未確定の確定  
情報によれば）、引続き会員の皆様の御  
協力をお願いいたします。





針葉樹会報 復刊 第43号

発行日 1975年6月

発行人 針葉樹会 代表 望月達夫

編集人 井草長雄

〒186 国立市北1-1-1 関方

印刷所 内外リッチ